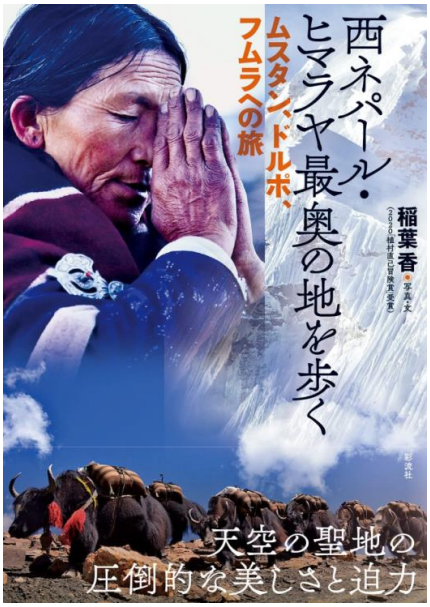
『西ネパール・ヒマラヤ最奥の地を歩く　―ムスタン、ドルポ、フムラへの旅―』（稲葉香著）



著者の稲葉香さんはヒマラヤトレッキングを続ける美容師。東南アジア・インド・ネパール・チベットアラスカを放浪し、旅の延長で山と出会ったそうだ。18 歳でリウマチを発病し、登山など不可能と思われたが同じ病気の僧侶・探検家の河口慧海の存在を知り、彼のチベット足跡ルートに惚れ込み 2007 年から西ネパールに通い始める。

この本は 88 ページまでが写真。89 ページから 174 ページまでが文章だ。厳しい西ネパールの自然や人々の暮らしの様子が良く伝わってくる写真集だ。

河口慧海は 1897 年から 1915 年に 17 年間かけて我が国未伝の経典を求め、日本人として初めて秘境チベットに潜入した。当時チベットは鎖国し、天然の峻によって多くの探検家も、容易に近づけなかった。慧海はカルカッタからインドに入り、ヒマラヤを越えチベット人に扮してラサに至りダライ・ラマに拝謁した。しかし、日本人であることがばれてチベットを脱出した。最初の 6 年間が「チベット旅行記」として纏められている。

私は 2014 年にアンナプルナ・サーキットを歩きトロンパスを越えた後、ムクチナート・カグペニ・ジョムソンを訪れた。この地はチベット文化圏で、河口慧海がラサに行く時に通った所だ。この北側にムスタンがある。特別な許可証がないと入れない所だ。1992 年まで外国人は入れない所だった。いまだに王が治めているエリアだと聞いている。著者は河口慧海のたどった道を確かめるべく、この地を何度も訪れている。アッパームスタンのツァーランは河口慧海が 1899 年、一年近く滞在した所だ。この村で著者は慧海の像に出会ったそうだ。慧海が今でも村の人々に信頼されていることが好く伝わるエピソードだ。
また河口慧海がどの峠を越えてチベットに入国したのか確認する作業。マゲン・ラやクン・ラではなくイェメルン・カンであることを確信する。ここまでしつこく調査する熱意は凄いことだ。

著者は 2003 年にカイラスに行く。2007 年にはドルポ横断。2012 年にドルポ遠征 60 日間。2014 年アッパームスタンのツァーラン訪問。2016 年ムスタン・ドルポ遠征、60 日間。2018 年にフムラ遠征。2019 年単独でドルポ越冬、103 日間と取り憑かれたように西ネパール遠征を行っている。

ドルポの冬・念願の越冬の章が素晴らしい。越冬期間は１０３日間となるので、現地の人に迷惑をかけないように自炊用の食糧・燃料など 200ｋｇをキャラバンで運び込む。5000m級の峠を越えないと入ることができない。雪が降り積もる前に入る計画を立て、2018 年実行した。2016 年にドルポを訪れたとき、食糧を持ってきたら泊まっていいよと言ってくれた僧侶がいた。そして越冬中の食糧・燃料を夏の間にデポもしてもらった。事前に複数回、現地とのやりとりが必要だったそうだ。冬はこの辺りの川が凍結し、沢を伝って行く時があるそうだ。チャダルだ。ラダック地方でも凍結した河を歩く。

チベット世界であるドルポでは、人々は祈るために生きていると著者は言う。冬のドルポ滞在中に印象に残ったのが満月の夜のプジャ（法要）だという。「来世について祈っている」というチベットの人々だが、今の人々は「現世のことを祈っている」と言っているそうだ。吹雪いている夜お寺に行きプジャに参加したそうだ。彼らは目の前の小さな世界だけでなく、宇宙全体を見て、感じ、祈っている。まるで曼陀羅の世界観を持っているように感じたそうだ。

冬のドルポは寒いそうだ。著者が寝泊まりをさせてもらった部屋はチベットスタイルで天井が開いており、つまり窓が開きっぱなしの状態で厳冬期を過ごしていたわけだ。部屋の中は－3℃で部屋に居るときは寝袋に入っていないと厳しい寒さだそうだ。外が－30℃でも暖が取れない部屋は寒かったそうだ。暖を取るのはお湯を入れた水筒のみ。やはり湯たんぽは必携だ。

私がかつて夏のラダックの民宿で泊まった部屋も、天井が１ｍ四方開いていた。天井から青空が見えたことを思い出した。ちなみにトイレの下では豚を飼っていた。豚は人の排泄物を食べるようになっていた。

この本の熱量が凄い。私はまだ著者に会ったことはないが、会ったらこの熱量に圧倒されるのではないかと思う。私も一度ドルポに行きたくなった。

この本は 2020 年「植村直己冒険賞」を受賞している。　（フカ）

稲葉　香著『西ネパール・ヒマラヤ　最奥の地を歩く―ムスタン、ドルポ、フムラへの旅―』
202２年１月　彩流社刊　2,200 円